

第6 部会

の最終第五章の「国家と宗教」で、精神的な危機への直面のものと心の根柢から現前する虚無性に触れ、神を前にしての絶望という中世的な危機から区別して、近世に特有の危機を「救う神を見失った虚無性」と名づけているところには、虚無性の理解についてのいっそう踏み込んだ姿勢がうかがえるのである。

ところで、欧羅巴近代の危機への洞察が、欧羅巴文明を取り込むことで近代化を遂行した近代日本に跳ね返り、時局の状況と重なって西谷に迫ってきたのは自然なことであつた。西谷の近代日本に対する姿勢を箇条書きの仕方を取り出すなら、第一に、「近代日本」は、世界が初めて真に「世界」として開かれるという世界的必然のなか国家という問題地平で扱われること、第二に、そのような世界性を背景になされる国家論は、国家と個人、国家と世界、個人と世界という複合的關係を含みつつ、同じく世界史的必然として現われた特殊統一的な国家群の問題をも取り込むことになり、その議論は哲学的な一般性を含む一方で現実的具体的な東亜新秩序の問題に向かうものになること、その際西谷は、個人であれ国家ないし国家群であれ民族であれ、世界における主体ないし主体性という立場を強く打ち出すことである。このような主体性への着目は、「根源的主体性」の問題とも繋がって、国家と個人が相互に否定的に媒介されて世界に開かれる根柢に「無の普遍」を求める宗教哲学的立場となり、それが「絶対無」と連関づけられることになる。

さらにこのような方向性は、日本が持ち得る可能性を過去の精神的伝統の中に探る主張となるのであるが、西谷はそれを決して単純に近代欧羅巴の危機に代わる手段の如きものと考えて

いたわけではない。西谷は、現下の日本が明治維新の転換後旧いエトスの退場に代わる新しいエトスを生成させ得ていないことを指摘しつつ、精神的エトスを体現していた実例を江戸時代の儒学者等に求めていく。それは、行と世界直観と宗教的信念が一つに融合していたような立場としてであつた。西谷自身が、否定を媒介とする統一、否定即肯定の可能性を、神仏儒の融合から成る伝統的世界観に認められると見なしていたかぎり、その伝統は、新たな世界の中で未だ可能性を問われたことのないものとして、かつ世界の中で創造的に変化し得るものとして、積極的に取り出されることになったのである。

清沢満之の内観主義

村山 保史

清沢満之は精神主義が「内観主義を要義とする」としていう。発表では、この「要義」という表現に含まれる清沢の意図を、「内観主義」という概念の分析を通じて考察する。

清沢は自己省察を「自己の成立如何」にかかわるものと「自己行動の実際如何」にかかわるものの二種に分け、後者を内観とする。前者の自己省察は自己の存在の認識論的（ないし心理学的）な考察にかかわる。後者の自己省察は倫理的な意味合いを帯びた実践的（実行主義的）な概念であり、（1）主観ないし主観の行動原理（主心念）の観察（観察的側面）、（2）行動

原理を効果的に実現する方策の指示や指導（修養的側面）といった二側面を含む。清沢の思索はこの意味での内観の歩みである。修養において主心念となるのは善悪の観念である。エピクテトスからの影響の強い『臘扇記』では、万物一体の真理への意識をもちつつも、主としてエピクテトスの思想の観点からの善悪が主心念とされ、『精神界』の諸論文（精神主義関係の講演を含む）ではエピクテトスの思想が前提されつつも、主として万物一体の真理の観点からの善悪が主心念とされる。内観の実際の歩みを見てみよう。

『臘扇記』での内観はエピクテトスの心の平静という観点から行われる。エピクテトスは自己反省の能力である理性的な「指導能力」の働きのよって心の平静を乱すもの（意志的なものと意志外のものとの混同）を除去しようとする。意志外のものではなく、混同が悪である。清沢の内観もこれに倣い、安心を求めて如意と不如意の混同を除去する。意志による制御が困難な死も、エピクテトス同様に死の練習（観想）という方策で制御しようとするのである。一方『精神界』の諸論文では、エピクテトスの思想を前提としつつ、『臘扇記』より明確に万物一体の観点から内観が行われる。意志的なものとの混同は除去されるべきであるにしても、同時に、意志外のものとの関係なしに自己があるわけでもないからである。万物一体の観点においては自己を全体との関係性において見ることが善である。如意なる主観に焦点を当てながらも、万物一体の観点から内観が行われることで、内観は二つの主義を導き出す。（1）万物は私のために存在する（存在や見解の根拠が主観に位置する）とい

う主観主義、（2）私は万物のために存在するという全責任主義である。有機的な全体構造をなす万物の関係性は家族関係に喩えられる。家族的な全体のなかでは他者への責任の行使は義務（服従）であるが、近親を益する自由でもあり、喜びである。全責任主義はさしあたり樂觀的な自由主義であり、満足主義であると言える。

しかし『臘扇記』での内観も『精神界』での諸論文の内観も、やがて行きづまりを迎える。如意と不如意の混同の完全な除去も無限の責任の完全な遂行も、有限な自己には過ぎた義務だからである。「吾人は此事〔修養〕を完成する能はざるなり」。不完全さの意識は罪悪の感覚となり、内観は凡夫としての自己を映し出す。こうして倫理的な修養としての内観の働きの消尽点の上に、相対が絶対に入って有限が無限に合致するような立場、つまり有限者の責任を絶対無限（如来）が負う他力主義が現れる。罪悪の感覚の軽減は宗教の仕事である。他力主義と結びついた万物一体の真理において厳密な意味での主観主義も自由主義も満足主義も全責任主義も成り立つと清沢は考える。

清沢は精神主義を、完全な立脚地を得た「精神の発達する条路」とする。発達過程における精神の在り方はさまざまな主義として表現されていた。精神主義はこういった主義の総体なのである。われわれの考察では精神の発展を促してこうした主義をもたらしたのは内観の作用であったから、精神主義を精神主義にへするものが内観だと言える。これが、精神主義が内観主義を「要義」とするということの意味なのであろう。